

「苦悶する黒い身体」の系譜 Remembering Muhammad Ali in the Genealogy of “Black Body in Pain” モハメド・アリを記憶する

坂下史子
SAKASHITA Fumiko

1. はじめに

モハメド・アリの死から一週間後の2016年6月10日、マイケル・エリック・ダイソンはある雑誌に寄稿した追悼文に「モハメド・アリはアメリカにおける黒人の男らしさを再定義した」という題名をつけた。アリがタイトルを剥奪される直前の3試合を分析した近年の研究も、彼を黒人のラディカルな伝統の系譜に置きつつ、家父長制や覇権的な（単数形の）マスキュリニティに抵抗したアリの言動を（複数形の）マスキュリニティーズを体現するものと再評価している。さらにベル・フックスも、2004年の論考において、アリが「オルタナティヴなマスキュリニティーズ」を創り出し、ステレオタイプとは異なる黒人男性のアイデンティティを主張したと分析する¹。

アリが既存の男性像とは一線を画する多様で複雑なアイデンティティ（マスキュリニティーズ）を創出したという指摘は、一見するとアリのこれまでのイメージとは齟齬をきたしているようにも感じられる。全盛期の圧倒的な強さや改宗後の政治的言動などに見られる「闘うアリ」の姿は、いかなる点において黒人の男らしさを再定義したのだろうか。またダイソンらは、こうしたアリの複雑な側面が現在ほとんど忘れられていることにも注意を喚起している。1996年のアトランタ五輪における国民的偶像化に顕著なように、アリは政治的・社会的忘却によって「トラブルメーカーからピースメーカーに、反逆者から聖人に」なったというのである²。

これらの識者が主張しているのは、マーク・アンソニー・ニールの言う「『判読しやすい』黒人男性の身体を……読みにくくすると同時に、いわゆる判読しにくい黒人男性の身体を……読みやすくする (rendering “legible” black male bodies . . . illegible, while simultaneously rendering so-called illegible black male bodies . . . legible)」ことの重要性である³。たとえば犯罪者化された黒人男性像にしろ、「非暴力」のキング牧師像にしろ、アフリカ系アメリカ人男性はこれまで分かりやすい (legible) イメージで描かれ、理解されてきた。アリもまた、その複雑な側面が捨象され単純な語りに収斂していく多数の伝説的人物のひとりであった。本誌所収の藤永論文と中村論文は、まさにニールと同様の関心でもって、「アリという謎」(藤永)「モハメド・アリという現象」(中村)に迫っている。しかし「アリに関する歴史研究ではない」と述べる中村論文のみならず、カシアス・クレイの「奇妙な来歴」を実証的に検証し「可能な限り『実像』へ接近」することを試みた藤永論文でも、アリの本質を捕まえることは結局のところ志向されていないように思える。藤永は次のように結論する。

どうやらわれわれは、「アリ」とは、ストリートでの、そしてラリーの演壇での、リング・サイドでの、ひとつの重要な記号であったと考えるよりほかないようだ。彼の「グレートな黒い肉体」は人びとがいろいろな意味を賦活していった場だったのである⁴。

中村もまた、アリが「象徴的な存在となり、なんらかの記号論的意味を読み込まれる『場』となっていく」ことに注目する⁵。いずれの論考も、アリの黒い身体をさまざまな意味が付与される「場」としてとらえている点で興味深い。藤永はブラック・パワー運動、中村はイスラームとストリート文化との関連で、アリという「記号」の解説を試みている。

本稿もまた、彼らと同様に、しかし彼らとはまた少し異なる視点から、モハメド・アリという「記号」を読み解いてみたい。すなわち、アリがボクサーとして闘ったことの意味を「苦悶する黒い身体」というスペクタクルの歴史と現在を紐解きながら検討するとともに、その闘いのなかで黒人の男らしさがどのように再定義されたのかを考察する。さらに本稿は、アリをめぐる政

治的・社会的忘却の問題を公的記憶化の文脈で再検討することも試みる。中村論文同様、本稿もアリについての研究ではない。ここで目指すのは、「苦悶する黒い身体」の系譜にアリの「グレートな黒い肉体」を加えることで、アリを「読み直す」ことである。

「苦悶する黒い身体」のスペクタクル

エリザベス・アレクサンダーは、アメリカでは何世紀もの間、公の場で消費される「苦悶する黒い身体 (Black body in pain)」が国民的なスペクタクルであり続けてきたと指摘する。彼女は黒人男女に対する奴隷制下の鞭打ちや再建期後のリンチから、現代のバスケットボールやボクシングまでを、人種をめぐる「暴力」のスペクタクルの系譜のなかに位置づけている⁶。前者がまさにこうしたスペクタクルであったことは言うまでもない。なぜなら、鞭打ちにしるリンチにしる、その目的は黒人の身体に苦痛を加えることだけではなく（そうであれば「公開」処刑である必要はない）、むしろ暴力を加える側と加えられる側、それを消費する側とされる側の力関係を目に見える形で提示することにこそ意義があったからである⁷。後者は前者のように明白な暴力のスペクタクルとは異なるものの、黒人（男性）アスリートの超人的な肉体の争い（とりわけボクシングは苦痛をともなう拳闘である）が聴衆に消費されるという点で、同様のスペクタクルであるというアレクサンダーの指摘は的を射ている⁸。

アフリカ系アメリカ人にとってのボクシングは、奴隷制廃止後の19世紀末から20世紀前半に主として南部で人気を博したバトルロイヤルにその起源がある。バトルロイヤルとは、複数のアフリカ系アメリカ人の青少年が目隠しをされ、わずかな賞金をかけて最後の一人になるまで闇雲に殴り合うという、白人見物客にとっての娯楽であった。ボクシングの試合の前座イベントとして行われることが多かったバトルロイヤルは、第一次世界大戦期には南部各地の米軍訓練基地でも娯楽として開催された。それは黒人男性の動物的側面ひいては人種の劣等を強調する場であり、ゆえに人種のヒエラルキーを再確認する場として機能していた⁹。バトルロイヤルの隆盛は黒人男性を

主なターゲットとしたリンチが南部で頻発した時期と重なるが、それはちょうど、男らしさと人種が強く結びついた言説がアメリカ社会を席巻していた頃でもあった。バトルロイヤルもリンチも、南部の家父長制や人種秩序といった既存の権力構造をより強固なものにするために用いられた文化装置であった¹⁰。

他方、この見世物は皮肉にも、未来の黒人プロボクサーが発掘される機会を提供してもいた。ボクサーのなかには屈辱的なこの見世物への参加を拒否した者もいたが、1908年に黒人初のヘビー級チャンピオンとなったジャック・ジョンソンは、若いころバトルロイヤルに頻繁に参加していたという¹¹。また、ソウル歌手のジェームズ・ブラウンも少年時代にバトルロイヤルを経験し、短期間ながらセミプロボクサーとして活動した。ブラウンは自伝のなかで次のように回想する。

俺の評判のおかげで、ほかの子供たちは、ベル・オーデトリウムでのバトルロイヤルに起用するケンカ好きな黒人少年のリクルートに現れた白人の男たちに、いつも俺を紹介した。バトルロイヤルでは目隠しをされ、片手は背後に縛られ、もう一方の手にグローブをはめられて、同じ状態の5人の少年たちとリングにほうり込まれるんだ。動くものなら何にでも殴りかかり、最後に残った者が勝者だ。野蛮に聞こえるが、バトルロイヤルは実際にはコメディなんだ。俺もそこではよろよろ歩いて、でたために振り回し、人々が笑っているのを聞くんだ。自分が搾取されていたなんて、俺には分からなかった。ただ分かっていたのは、一ドルもらえて楽しんでたということだけだった¹²。

1952年に発表されたラルフ・エリソンの長編小説『見えない人間』は、バトルロイヤルがいかに暴力のスペクタクルを作り出し、その消費のなかで人種の優劣を再構築したかを最も効果的に伝える作品である。翌年全米図書賞を受賞したこの作品は、バトルロイヤルを名前のない主人公の黒人男性が初めて味わった人種の屈辱の経験として、のちに彼が「見えない人間」となるに至る極めて重要な契機として、紙幅を割いて描いている。高校の卒業式で総代として行ったブッカー・T・ワシントンを彷彿させる演説を高く評価された主人公は、演説を再披露するために地元白人名士が集う場に招待され

る。しかし会場に到着した彼を待ち受けていたのは、演説の前にクラスメートとともに10人のバトルロイヤルに参加することであった。主人公は怒号と嘲笑が飛び交うなかでの殴り合いを強いられた後、血だらけのまま演説を行い、黒人大学への奨学金を受け取るのである¹³。

抵抗の場としての黒い身体

アフリカ系アメリカ人の歴史において、「苦悶する黒い身体」のスペクタクルに対する抵抗には長い伝統がある。たとえば、奴隷制から逃れる前の15歳のフレデリック・ダグラスが奴隷所有者の暴力に抗い、男性性や人間としての尊厳を取り戻した逸話は有名である¹⁴。また、リンチ反対の動きは、この人種暴力が増加しはじめたのと同時に始まり、その後20世紀前半まで様々な個人・団体によって継続された。もとより反リンチ運動の最重要課題はリンチの撲滅であったが、とりわけアフリカ系アメリカ人による反対運動は、犠牲者が忘れ去られてしまうことや、リンチを正当化した「黒人レイプ犯」という人種ステレオタイプの再強化にも抵抗した。たとえば、頻発するリンチ事件の報道において、黒人新聞は犠牲者の名前を付記してリンチの写真を転載しただけではなく、生前の姿を報道することによって、主流メディアによる黒人男性の犯罪者化に異論を唱えた¹⁵。こうした取り組みは、現代アメリカ社会において黒人男女への警官の殺害行為が頻発する中で生まれた“Black Lives Matter”（黒人の命は重要）運動や、黒人女性犠牲者の可視化を指向した“Say Her Name”（彼女の名前を告げよ）運動へと受け継がれている¹⁶。

さらに、アフリカ系アメリカ人反リンチ活動家たちは、多くの場合、「苦悶する黒い身体」を直接的・間接的な方法で再提示するという抵抗戦略をとった。直接的とは、先述したようにリンチ写真を黒人新聞などに転載することで対抗表象のスペクタクルを創造することであり、間接的な手段とは、人種暴力のスペクタクルの内側に入り込み、自らの身体を使って犠牲者を再現することで死の空間／瞬間を可視化するという方法である。それはシュアート・ホールが黒人に対する侮蔑的なステレオタイプという人種表象に抵



【写真1】ハーワード大学生の抗議行動(出典 Bettmann/CORBIS)

抗する手段の一つとして挙げた、「内からの抵抗」戦略である。ホールは黒い身体を表象戦略の主要な場として用いることで、人種的差異をめぐるジェンダーや性の定義づけに意図的に対抗することを提案した¹⁷。

例を見てみよう。【写真1】は1934年12月に約60名のハーワード大学生によって行われた抗議行動で、第一期ローズベルト政権の犯罪対策が議論された第一回全国犯罪会議の会場前での様子である。ちょうどその二カ月前にフロリダ州で強姦殺害容疑の黒人男性に対する凄惨なリンチ事件が起こり、全国黒人地位向上協会 (NAACP) を中心に反リンチ運動が活発になっていた。そのような時期に開催されたにもかかわらず、同会議ではリンチが議題に含まれていなかった。そこで学生たちは、ひとりひとりがメッセージの書かれた小さな紙片を胸に貼りつけ、絞首縄を首にかけて会議会場の入口から会場前の歩道に等間隔に並び、午前中の会合を終えた会議参加者を無言で出迎えたのである¹⁸。

死の空間／瞬間の犠牲者を視覚化したこの写真のインパクトは、黒人学生が絞首されたリンチ犠牲者を体現していることだけに留まるものではない。それは、連邦政府が犯罪を議論する空間から抹殺したリンチを、彼らが公共の空間に再生させたことにもある。さらに重要なのは、性犯罪者の烙印を押されリンチの犠牲となった無数の黒人男性やその責を負わされた「性的にみだらな」黒人女性と同年代の大学生たちが、リスペクタブルな黒い身体で犠



【写真2】マイアミ・ヒート選手の抗議行動
 (出典 ジェームズの2012年3月23日付ツイッターより)

性を体現し、こうした人種ステレオタイプの汚名を晴らそうとしている点である¹⁹。

死の空間／瞬間を再現するという同様の抵抗戦略は、2012年3月にフロリダ州で17歳のトレイヴォン・マーティンが射殺された事件を受けて、全米各地で展開された抗議行動にも見られた。マーティンが射殺されたときに着用していたとされるフードのついた上着は、自警団の男性がマーティンを「極めて怪しい」と判断した根拠であり、殺害の正当性を担保する記号のひとつであったが、抗議デモでは参加者の大多数がフードを着用し、SNS上では著名人から一般人までフード着用写真をアップする抗議行動が瞬く間に広がった²⁰。地元プロバスケットボールチームのマイアミ・ヒートのスター選手であったレブロン・ジェームズが自身のツイッターに掲載した写真もそのひとつである【写真2】。13名の選手がユニフォームのフードをかぶりうつむく姿は、まさにマーティンが射殺された死の空間／瞬間を再現するものであり、無言の抗議という点でも先のハワード大学生の例と極めて似通っている。

この写真はまた、フードで覆われた黒人男性アスリートの「グレートな黒い肉体」が犯罪者化された黒人青年像を想起している点でも、強烈な抗議メッセージを発している。人種とスポーツを研究したジョン・ホバマンが「危険人物としてのステレオタイプが心理的な力を発揮するのは、人々が、恐

そうで、危険そうな黒人アスリートのイメージに常に晒されているからである」と述べているように、本来ならばコート内での彼らの圧倒的な身体能力や攻撃的な肉体こそが（驚嘆と）脅威の対象となるはずである。その彼らが肌の露出もなく、身動きもせず、視線を合わすこともなくたたくむ写真は、この黒い身体はどこが脅威となりうるのかと、無言で問い質しているようでもある²¹。

リング上で闘うアリをこれらの明白な人種暴力に対する「内からの抵抗」の系譜に位置づけることは、一見すると見当違いのようにも思えるが、ボクシングもまた「苦悶する黒い身体」のスペクタクルであることに鑑みれば、彼の姿も、かつてのバトルロイヤルで消費された黒い身体²²の歴史に異議を申し立てる、ひとつの抵抗の形であったと見なすことができるのではない。すなわち、黒人男性の野蛮性や人種的劣等を証明することを強いられたリング上の黒人青年たちの「苦悶する黒い身体」を、アリの身体は先達のボクサーと同様に、一方で想起させるのである。

しかし他方、アリの「内からの抵抗」は、ハワード大学生やマイアミ・ヒートの選手たちのような、リスペクタブルな無言の抵抗ではない。スチール写真においてさえ、闘うアリの黒い身体は、黒人の野蛮性や人種的劣等のステレオタイプに大声で異を唱えている。黒人フェミニストのジョイ・ジェームズはアリを“Black Is Beautiful”と“Black Is Militant”の精神を統合した人物だと評しているが、アリがリング上で行ったのは、美しさにしろ、戦闘性にしろ、自らの「グレートな黒い肉体」を通じて多様な黒人（男性）性を肯定することであった²²。ジェームズも注目したアリの「可愛い」という言葉の使用について、マイク・マークシーは次のように分析する。

「オレはボクサーにしては美し過ぎるな」、と彼は自慢気に話していた。この一言で、男は美に対する自惚れを見せてはならないというタブーを、いとも簡単に侵犯したのだ。彼に言わせれば、彼は「いちばんグレート」なだけでなく、「いちばん可愛い」のだった。通常は女性的魅力を褒める形容詞の最上級をここで彼は使っている。黒人男性がこのような態度で語ることは、多くの暗黙の前提——肉体的な（美）を規定する人種や性と相関関係にある固定観念——を大混乱に陥れた²³。

「苦悶する黒い身体」のスペクタクルという、既存の人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティの秩序を再強化するための場を大混乱に陥れるアリの行為は、まさにホールの提案する「内からの抵抗」そのものである。「アリは理想的なアメリカの原始的男性として見世物になることを拒んだのだ」と、フックスは言う。多弁で感情豊かなアリの言動は、寡黙で感情を表に出さない家父長的男性像の理想に異議を唱えてきたのだと。多様な男らしさのありかた——複数形のマスキュリニティーズ——が、ここには読みとれる²⁴。

藤永論文が指摘するように、改宗・改名前のアリの（リング外での）言動は、「ほら話と機智で人心を和やかにさせる道化、すなわち、白人の脅威になりようのない、 minstrel 的な黒人男性のもの」であった。その後の言動によって「黒人の男性の叛逆的イメージが、さまざまに解釈されるなかで拡散していった」こととあわせて、藤永は「両義的な『謎』を凝縮した彼の『黒い身体』は、実のところ、黒人男性の両義性そのものであった」と結論づけている。この両義性は、アリが改宗したネイション・オブ・イスラームの求める身体的な振る舞いや所作について、中村論文が「ミドル・クラスのマナーとストリート文化の不文律とが微妙に入り混じる」と考察している点にも通じる。「苦悶する黒い身体」のスペクタクルにおいても、アリの「黒い身体」は単純なリスペクタビリティの政治に還元されないのである²⁵。

「闘うアリ」とエメット・ティル

アリがボクシングという「苦悶する黒い身体」のスペクタクルを主戦場として、内からの抵抗を続けたことは重要な意味を持つ。1975年に出版されたアリの自伝『世界最強の男』(*The Greatest: My Own Story*)は、こうした「闘うアリ」の原点を黒い身体に加えられた暴力との直接的な関連で示している点で興味深い。ここで注目したいのは、自伝の冒頭で紹介されるエメット・ティル事件にまつわるエピソードである。

エメット・ティル事件とは、1955年にシカゴ出身の14歳の少年がミシシッピ州で殺害された有名な事件のことである。ティルは夏休みに親戚を訪れた際、地元の雑貨店で若い白人女性店員に声をかけ口笛を吹いたとして、女性

の夫らに誘拐され、殺害された。数日後、本人とは判別不能なほど損傷した遺体が近くの川から発見され、中を確認できないように枕を打たれた棺がシカゴに戻されるが、ティルの母親は棺の蓋を開けて葬儀を敢行し、数万人がティルに加えられた凄惨な暴力の痕跡を目撃した。黒人誌『ジェット』が遺体写真を掲載したことで、この事件は全米に衝撃を与えた²⁶。

自伝は、1973年3月にケン・ノートンとの試合に敗れ顎を骨折したア리가、療養のために故郷のケンタッキー州レイヴイルに戻るところから始まる。彼が再会した母親を車に乗せて市内を走る間、母親は人種隔離時代の息子の思い出を語り始める。ア리가幼いころ、黒人に対する不正義の知らせを耳にするたびにベッドに引きこもって一晩中泣いていたことや、ミシシッピ州でエメット・ティルがリンチされたとき、どれほど動揺していたかを、母親はアりに次々と語りかける。「覚えているかい？お前は何かしてエメットを助けることはできなかったのかって、いつも訊いていた。お前が小学校にいたときから高校を卒業するまで、私たちは心配していたのよ。もしボクシングに出会わなかったら、お前はどんなことに巻き込まれていたか……」。アリはティルの話を聞くと、今は使われていない古い鉄道の駅のそばに車を停め、外に出て次のように回想する。

エメット・ティルと俺は同じぐらいの年齢だった。ミシシッピ州サンフラワー郡で彼が殺された一週間後、俺は仲間の少年たちと通りの角に立って、黒人向けの新聞や雑誌に載った彼の写真を見ていた。うち一枚では、彼は笑って幸せそうだった。別の写真では、彼の頭は腫れ上がり、殴られてつぶれていて、目は瞼から飛び出し、口は歪んで裂けていた。彼の母親は大胆なことをやってのけた。シカゴで何百何千の人々が蓋を開けた棺の前に参列し、ひどく損傷した彼の遺体を見るまで、彼女は息子を埋葬することを拒んだのだ。彼が同じ年、日にちの生まれだと知り、俺は彼に対して深い親しみを覚えた。夜になると父はそのことについて話し、その犯罪を大げさに語った。

エメットのことが頭から離れなかったが、ある夕刻、俺は白人たちに彼の死の仕返しをするための方法を考えた²⁷。

実際にはアリはティルとは同年同日の生まれではなく、半年ほど年下だった。しかしそのような事実誤認よりも、むしろここで注視すべきなのは、ア

リが同年同日生まれだと信じた少年の身に起こった悲劇を自分のことのように感じていたこと、そしてアフリカ系アメリカ人に対する不正義や暴力の物語が、家庭やコミュニティの中で絶えず共有されていたという点である。

とりわけ、アリが自分と同世代のティルに加えられた人種暴力を、写真という形で同世代の仲間とともに目撃した点は極めて重要である。アレクサンダーは、ティルと同世代の、特に南部にルーツを持つアフリカ系アメリカ人の若者にとって、ティルの物語は自らの身体の脆さ（命のはかなさ）や、ティルに起こったことが自分の身にも起こりうることを理解させる通過儀礼であったと指摘する²⁸。事実、アリと同時代に活躍したテニス選手アーサー・アッシュも、「エメット・ティルに起こったことを僕たちはみんな知っていた。1955年の彼の死は、僕の青年時代に影を落としたのだ。リッチモンドの、そしてきっとアメリカ中のほとんどの黒人青少年の青春時代にも。……それは誰にでも起こりうることだった」と回想している²⁹。

また、アリが高校を卒業するまでその身を案じていたという母親の告白は、黒人男性の身体がつねに暴力に晒されることを運命づけられていたこと——アブドゥル・R・ヤンモハメドが「死に縛りつけられた者 (the death-bound-subject)」と呼ぶ存在であったこと——を明示している³⁰。このように黒い身体に加えられる暴力の物語が自身にも起こりうること、すなわち、自身もまた「死に縛りつけられた者」であることを否応なく自覚させられる出来事として、アフリカ系アメリカ人の間で受容されるさまは、近年の人種暴力事件でも頻繁に見られる現象となっている。たとえば先述したマイアミ・ヒートの写真に添付されたハッシュタグのひとつは#WeAreTrayvonMartin（私たちはトレイヴォン・マーティンだ）であったし、オバマ大統領が「トレイヴォン・マーティンは35年前の自分だったかもしれない」と述べたことも記憶に新しい³¹。

ティルの死を自分のことのように受け止めたアリが報復としてとった行動は、友人とともに靴磨き屋の小屋に忍び込んで鉄製の靴置きを盗み出し、鉄道の線路に置いて列車を脱線させることであった。行動を起こす前、アリは駅の近くで見かけた徴兵を呼びかけるポスター“Uncle Sam Wants You”にも石を投げている。アレクサンダーは、アリの行動を、靴磨きという黒人の

従属性を象徴する職業の道具で北部への移動手段である鉄道の線路にダメージを与えたと解釈し、その抵抗の意義を指摘している³²。さらに言えば、徴兵のポスターに投石するアリの姿は、後の兵役拒否行動の端緒とも見ることができる。

このように、アリの自伝は、彼がティルの遺体写真という「苦悶する黒い身体」のスペクタクルを目撃したことで初めて抗議行動を起こし、後の「闘うアリ」が誕生した、という物語を提示している。しかしこの自伝には、藤永論文も指摘するように、トニ・モリソンが編集者として加わっており、さらにはリチャード・ダーハム (Richard Durham) が共著者として名前を連ねている。ダーハムは1940年代から50年代にかけてシカゴで活躍したアフリカ系アメリカ人ラジオ放送作家である。彼はニューディール政策の一つである雇用促進局の連邦作家計画 (Federal Writers' Project) や『シカゴ・ディフェンダー』紙、『エボニー』誌での執筆活動を経て、戦後はシカゴのラジオ局の放送作家をしていたが、1948年から50年までの間、*Destination Freedom* と呼ばれるラジオ番組の放送作家を務めた。ダーハムはそこで、メディアにおけるアフリカ系アメリカ人のステレオタイプを打破するために、黒人指導者の功績に焦点を当てるようなラジオ・ドラマの台本を次々と書き、番組は人気を博した³³。

モリソンとダーハムという、政治的で人種のプライドにあふれた二人の作家によって、アリの自伝が脚色された可能性は否めない (有名な金メダル投棄のエピソードの真偽が定かではないことは、藤永論文でも指摘されている)。ティル事件については、自伝が発表された年の作家スタッズ・ターケルによるインタビューの中でも、「自分と同じ子供」だったティルの事件について「読み」、「自身のことも考えさせられた」と短く答えてはいるものの、アリの肉声には自伝のような微細な描写もドラマ性も不在である³⁴。やや穿った見方をすれば、母親がアリの身を案じていたことも、アリが友人とティルの写真を見たことも、その後ティルの仇をとる行動に出たことも、いずれも真偽は分からない。しかしこれらの物語がアリ自身の、あるいはモリソンとダーハムによる脚色だったとすれば、ここではそのこと自体が注目に値する。すなわち、エメット・ティルという殉教者の物語がアリを政治的に

覚醒させたという語りが、アフリカ系アメリカ人の歴史において正統なものとして紡ぎ出され、記憶されているという点である。

おわりにかえて——公的記憶化の問題

1994年の「重大な記憶と黒人の公共圏」という論考の中で、ヒューストン・ベイカー・ジュニアは、アメリカ黒人のモダニティを特徴づける「ノスタルジア」と「重大な記憶」という二つの概念について、次のように述べている。

ノスタルジアとは、過去を意図的に美化し、再構築するという行為であり、そしてそれは二つの作用をもたらす。一つは革命的变化を、過ぎさってしまった、或いは最早危険ではない逸脱として描くということであり、もう一つは歴史をフィクション化するというものである。

これに対して、「重大な記憶」は革命的变化の核心に位置するものである。……「重大な記憶」の中心的機能とは、過去と現在との間を橋渡しする記録を累積的かつ集合的に維持していくというものである³⁵。

ベイカーの議論はアリをめぐる公的記憶化の問題にも当てはまる。アリをめぐる語りが「トラブルメーカー・反逆者」から「ピースメーカー・聖人」へと変化した最大の要因は政治的・社会的忘却である、とダイソンは指摘していた。つまり、主流のアリ像は「重大な記憶」ではなく「ノスタルジア」であり、しかもそれは、アリがパーキンソン病によって「寡黙な男」へと変貌したからこそ可能になった語りである。フックスはそれを「去勢された黒人男性の象徴」と呼んでいるが、もしアリが現役時代と同じように「物言う黒人男性」であり続けたとしたら、おそらく彼はナショナル・ヒーローとはならなかったであろう³⁶。

同様の「ノスタルジア」はアリと同時代のキングやローザ・パークスの公的記憶化に際しても起こっており、近年こうした歴史像を再検討し脱神話化する研究が出てきていることは周知のとおりである。「ノスタルジア」を脱し「重大な記憶」を回復しようとする試みは、ダイソンやフックスの論考のみならず、本誌で藤永論文や中村論文が明らかにしようとしたアリ像でもあ

る³⁷。

ベイカーが言うように、「重大な記憶」の主たる機能が「過去と現在との間を橋渡しする記録を累積的かつ集合的に維持していく」ことであるならば、アリをハワード大学生とマイアミ・ヒートの選手たちの間に置いて「内からの抵抗」の系譜に加えることもまた、「重大な記憶」の回復となるはずである。さらに、アリが体現していた黒人男性性の多様性・複雑性を思い出すことで、ラディカルな黒人（男性）の伝統と黒人フェミニスト思想との接合点を掘り起こしていくことや、アフリカ系アメリカ人自身によるノスタルジックな記憶化の問題を批判的に検討することも重要になるだろう。本稿が試みたのはその一端である。

ベイカーの論考は、「レーガン・ブッシュ時代を経験した後で、キングのことを思い起こすという行為は、必然的に重大かつ想像的行為となる。そのためには、ノスタルジアに抗していかなねばならない」と締めくくられている。あの時代が色褪せるほど想像を絶する困難な時代を迎えた今こそ、「重大な記憶」を積み重ねていくことが求められているのではないか³⁸。

本稿は2016年11月26日に立教大学池袋キャンパスで開催された立教大学アメリカ研究所主催の第8回「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会「モハメド・アリとは誰か——『アメリカン・レジェンド』の虚実」でのコメントに基づいている。報告者の藤永康政氏と中村寛氏の刺激的なご報告ならびに参加者を交えた質疑応答での議論を踏まえて、コメントの枠を越える論考をまとめさせていただいた。両氏と参加者の皆様に深く感謝するとともに、企画と運営にあたり、アリに関しては全く門外漢の筆者にお声がけくださった研究所の方々にも謝意を表したい。なお、本稿には筆者なりに両氏の論考を反映することを試みたが、正鵠を得ていないとすれば筆者の責である。

註

¹ Dyson [2016]; Jones [2015: 265-277]; hooks [2004: 22-23].

² Dyson [2016]. 同様の指摘については、マークシー [2001: 6-12] も参照のこと。

³ Neal [2013: 8].

⁴ 藤永 [2017: 135].

5. 中村 [2017: 147].
6. Alexander [1995: 82-83]. アレクサンダーの論考は、執筆当時の1990年代に頻発していた「苦悶する黒い身体」の国民的スペクタクルの例を列挙している。すなわち、元ワシントンDC市長マリオン・バリーの麻薬使用および逮捕の瞬間、クラレンス・トーマス最高裁判事の上院公聴会、マイク・タイソンのレイプ裁判、HIV ウィルス感染とエイズ感染をそれぞれ公表したマジック・ジョンソンとアーサー・アッシュの記者会見、ロドニー・キング殴打事件などである。
7. Fuoss [1999: 17].
8. Fleetwood [2015: 81-84]; 萩原 [1997: 222-223].
9. Kaye [2001: 218-219, 224-225].
10. Bederman [1995: 1-44].
11. Kaye [2001: 226]; Early [1988: 113].
12. Brown [2003: 27]. 強調は原文の斜体に基づいている。
13. Ellison [1995: 16-33]. このシーンはジャック・ジョンソンを念頭に置いて書かれたと指摘する論考もある。Early [1988: 113].
14. Douglass [1986: 112-113].
15. Sakashita [2012: 179-192]; 坂下 [2012].
16. たとえば Merrill and Voices for Equality [2016]; Harris & Tillis [2015] を参照。
17. Hall [2013: 274]. 同様の抵抗戦略を提案する hooks [1994] も参照のこと。
18. 坂下 [2012: 22-25].
19. リスペクタビリティの政治に関しては、Higginbotham [1993: 185-229] を参照。
20. マーティン事件およびその後の抗議運動については、Fleetwood [2015: 14-31]; Harris & Tillis [2015] を参照。
21. ホバマン [2007: 33].
22. James [1999: 175].
23. マークシー [2001: 80].
24. hooks [2004: 22].
25. 藤永 [2017: 126, 130, 136]; 中村 [2017: 150]. リスペクタビリティの政治によらない「内からの抵抗」の例として、Sakashita [2011] を参照。
26. *Jef* September 8, 15, 22, 1955. テイルの女性への言動の真偽はこれまで定かではなかったが、こ

の女性にインタビューした Tyson [2017] は、彼女が自身の申し立てを嘘と認めたことを明らかにしている。

27. Ali [2015: 34-35].

28. Alexander [1995: 92].

29. Ashe [1994: 128-129].

30. JanMohamed [2005: 2]. リチャード・ライトの作品に見られるリンチの脅威の思想的・政治的機能を分析した研究のなかで、ヤンモハメドは「死に縛りつけられた者」を「幼い頃から、差し迫ったものとして至るところに存在する死の恐怖によって形作られている者」と定義している。

31. Cohen [2013]. 以下も参照のこと。Coates [2015].

32. Alexander [1995: 93-94].

33. Savage [1999: 260-270].

34. Radkins [2017]. 音源は 1975 年 11 月 26 日のもの。

35. バイカー [1997: 34].

36. hooks [2004: 23]. ジェームズも同様の指摘をしている。James [1999: 175].

37. パークスについては McGuire [2011] を、キングに関しては彼の「ラディカル」な演説を所収した King [2015] を参照。

38. バイカー [1997: 54].

参考文献

Alexander, Elizabeth. " 'Can You Be BLACK and Look at This?' : Reading the Rodney King Video(s)." In *The Black Public Sphere: A Public Culture Book*. Ed. The Black Public Sphere Collective. Chicago: University of Chicago Press, 1995.

Ali, Muhammad, and Richard Durham. *The Greatest: My Own Story*. 1975. Los Angeles: Graymalkin Media, 2015.

Ashe, Arthur, and Arnold Rampersad. *Days of Grace: A Memoir*. 1993. New York: Ballantine Books, 1994.

バイカー, ヒューストン, Jr. (一木順訳) 「重大な記憶と黒人の公共圏」『現代思想』第 25 卷 11 号 (1997 年 10 月), 34-56 頁.

Bederman, Gail. *Manliness and Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*. Chicago: University of Chicago Press, 1995.

Brown, James. *James Brown: The Godfather of Soul*. 1986. New York: Da Carpo Press, 2003.

- Carrington, Ben. "Sport, Masculinity, and Black Cultural Resistance." *Journal of Sport and Social Issues* 22:3 (August 1998): pp. 275-298.
- Coates, Ta-Nehisi. *Between the World and Me*. New York: Spiegel & Grau, 2015.
- Cohen, Tom. "Obama: 'Trayvon Martin Could Have Been Me.'" CNN July 19, 2013.
<<http://edition.cnn.com/2013/07/19/politics/obama-zimmerman/index.html>> Last accessed February 3, 2017.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*. 1845. New York: Penguin Books, 1986.
- Dyson, Michael Eric. "Muhammad Ali Redefined Black Masculinity in America." *VICE* June 10, 2016.
<https://www.vice.com/en_us/article/muhammad-ali-redefined-black-masculinity-in-america-456> Last accessed November 20, 2016.
- Early, Gerald. "The Black Intellectual and the Sport of Prizefighting." *The Kenyon Review*, New Series, 10:3 (Summer 1988): pp. 102-117.
- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. 1947. New York: Vintage International, 1995.
- Farred, Grant. "WHAT'S MY NAME? MUHAMMAD ALI, POSTCOLONIAL PUGILIST." *Dispositio* 20:47 (1995): pp. 37-58.
- Fleetwood, Nicole R. *On Racial Icons: Blackness and the Public Imagination*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 2015.
- 藤永康政「モハメド・アリの『誕生』——人種の表象が変化する瞬間の一考察」真島一郎編『二〇世紀〈アフリカ〉の個体形成——南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』平凡社, 2011年, 596-617頁。
- 「What's Love Got to Do with It? ——公民権運動の記憶とブラック・パワー」『立教アメリカン・スタディーズ』第36号, 2014年, 7-37頁。
- 「モハメド・アリの生涯とその『遺産』」『立教アメリカン・スタディーズ』第39号, 2017年, 121-141頁。
- Fuoss, Kirk W. "Lynching Performances, Theatres of Violence." *Text and Performance Quarterly* 19 (1999): pp. 1-37.
- 萩原弘子「黒人男性性——黒人フェミニストの視点」『現代思想』第25巻11号(1997年10月), 214-225頁。
- Hall, Stuart. *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*. 2nd Ed. New York: Sage, 2013.
- Harris II, Emmanuel, and Antonio D. Tillis, eds. *The Trayvon Martin in US: An American Tragedy*. New York: Peter Lang, 2015.
- Higginbotham, Evelyn Brooks. *Righteous Discontent: The Women's Movement in the Black Baptist Church, 1880-1920*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1993.
- ホバマン, ジョン(川島浩平訳)『アメリカのスポーツと人種——黒人身体能力の神話と現実』明石書店, 2007年。
- hooks, bell. "Feminism Inside: Toward a Black Body Politic." In *Black Male: Representations of Masculinity in Contemporary American Art*. Ed. Thelma Golden. New York: Whitney Museum of American Art, 1994: pp. 127-140.

- . *We Real Cool: Black Men and Masculinity*. New York: Routledge, 2004.
- James, Joy. *Shadowboxing: Representations of Black Feminist Politics*. New York: St. Martin's Press, 1999.
- JanMohamed, Abdul R. *The Death-Bound-Subject: Richard Wright's Archaeology of Death*. Durham: Duke University Press, 2005.
- Jones, Johnny. "Black Radical Masculinities in American Warfare: Reconfiguring Resistance in the Body of Muhammad Ali towards Exile." *NORMA: International Journal for Masculinity Studies* 10:3-4 (2015): pp. 265-280.
- Kaye, Andrew M. "'Battle Blind': Atlanta's Taste for Black Boxing in the Early Twentieth Century." *Journal of Sport History* 28:2 (Summer 2001): pp. 217-232.
- King, Martin Luther Jr. *The Radical King*. Ed. Cornel West. Boston: Beacon Press, 2015.
- マークシー, マイク (藤永康政訳) 『モハメド・アリとその時代——グローバル・ヒーローの肖像』 未来社, 2001年.
- 丸山雄生 「アメリカン・ゴリラの愛と死——『改革の時代』のサルたち」『現代思想』第44巻22号 (2016年12月), 181-193頁.
- McGuire, Danielle L. *At the Dark End of the Street: Black Women, Rape, and Resistance—a New History of the Civil Rights Movement from Rosa Parks to the Rise of Black Power*. New York: Alfred A. Knopf, 2011.
- Merrill, Mary Canty, and Voices for Equality. *WHY BLACK LIVES MATTER (TOO): A Revolutionary Call to Action*. Bloomington, IN: AuthorHouse, 2016.
- 中村寛 「モハメド・アリという現象——ストリートの所作、イスラームの魂、黒い身体」『立教アメリカン・スタディーズ』第39号, 2017年, 143-161頁.
- Neal, Mark Anthony. *Looking for Leroy: Illegible Black Masculinities*. New York: New York University Press, 2013.
- Radkins, Grace. "If Emmett Till Lived, He'd Have Been Your Age." *Studs Terkel Radio Archive Blog*, February 1, 2017.
<<http://studsterkel.wfmt.com/blog/if-emmett-till-lived/>> Last accessed February 3, 2017.
- Sakashita, Fumiko. "The Politics of Sexuality in Billie Holiday's 'Strange Fruit.'" In *Gender and Lynching: Politics of Memory*. Ed. Evelyn M. Simien. New York: Palgrave Macmillan, 2011: pp. 103-130.
- . *Building the Black Public Sphere: Lynching, Commemoration, and Anti-Lynching Struggles in the United States*. Ph.D. dissertation. Michigan State University, 2012.
- 坂下史子 「一九三〇年代半ばの反リンチ運動とアフリカ系アメリカ人——クロード・ニール事件をめぐるNAACPの活動を中心に」『歴史評論』第744号 (2012年4月), 17-27, 41頁.
- Savage, Barbara Dianne. *Broadcasting Freedom: Radio, War, and the Politics of Race, 1938-1948*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999.
- Tyson, Timothy B. *The Blood of Emmett Till*. New York: Simon & Schuster, 2017.